

編集の序

本書は肝臓領域における診断・治療手技を効率的に学ぶために企画しました。何かを学習するために本を読むことは基本中の基本ですが、手技的なものを修得するためには専門家が実際に行っている手技を見ることが効率的と思われます。このため、本書では、専門家の実際の手技を見ることができるよう動画を作成してDVDに保存しました。本書の執筆は各分野の第一人者に依頼しており、初心者だけでなく経験者にとっても得るところが大きいと思われます。スタンダードとなっている方法には合理的な理由があります。また、ちょっとしたノウハウの差が最終的に大きなアウトカムの差となることもあります。他施設の手技を見ることによって、自分たちの方法の不備を発見したり、自分たちの技術レベルを再認識したりできます。技術水準の向上を志す際の道標となるでしょう。

わが国の肝臓専門医は多岐にわたる診断・治療手技を担当しています。腹部超音波およびそれを用いた各種の穿刺手技、腹部血管造影を基本とした各種のカテーテルインターベンション、上部消化管内視鏡と胃食道静脈瘤治療、果ては腹腔鏡下インターベンションまで挙げられますが、これらの手技のなかには、諸外国なら放射線科医、消化器内視鏡専門医、消化器外科医など細分化された各専門医のみしか行えないものも少なくありません。このため、外国の肝臓専門医からは「日本の状況が羨ましい」とよく言われます。日本の肝臓専門医は、ある意味では非常に恵まれた状況にあると思われます。

本書では主に肝細胞癌、門脈圧亢進症といった病態の診断・治療手技を取り上げましたが、これらの病態の背景には慢性肝疾患・肝硬変が存在するため、全体としての治療の一貫性を保つためにも、肝機能障害の管理に精通した肝臓専門医が担当することが本来望ましいと思われます。しかし、高度に専門化した診断・治療手技を修得することは容易ではありません。そして、未熟な技術で侵襲的手技を行うことが社会的に許容されなくなっていることは、昨今の報道をみればよくわかると思われます。肝臓専門医、そして日本の肝臓病学の将来を担う若手医師が肝臓領域における診断・治療手技を修得していく過程で本書を活用いただければ幸いです。

最後に、本書の執筆に携わっていただいた先生方や羊土社の編集部の方々に心から感謝致します。

2013年7月

椎名秀一朗
建石良介